



2017 年度 2  
えんだより

社会福祉法人 恵泉福祉会  
光の子保育園  
園長 長島 博樹

## 主 題 育ちあう

### 月のわがい

- 神さまに愛されているもの同士として、互いに認め合う。
- 自分やともだちの得意なこと、苦手な事がわかり受け入れる。
- 提案したり、譲り合ったりしながら共に生活する。

### おことば

そのお受けになった傷によって あなたがたは癒されました。  
(ペトロへの第一の手紙章 2章24節)

### 行 事 予 定

#### 2 月

- 03日(土) 卒園写真撮影(5歳児のみ) 2・3月誕生日会
- 08日(木) 5歳児自主遠足
- 15日(木) ランチデー・お別れ遠足  
(※詳細はおたよりを参照ください。)
- 23日(金) 16:00~3月1日 10:00 作品展  
(一年間の成長を作品と共に振り返る時としていただけますように)

#### ~お知らせ~

2017年12月のクリスマス祝会にて皆様よりお預かり致しました献金は、**97,984円**でした。「日本キリスト教海外医療協力会」へ送金させていただきました。大変遅くなりましたが、報告させていただきます。有難うございました。

#### 3 月

- 01日(木) 新入園説明会 12:30~ 作品展 10:00まで
- 02日(金) お茶会
- 06日(火) 卒園お祝い会
- 10日(土) 卒園式
- 13日(火) 未満児遠足(※お知らせを参照ください。)
- 15日(木) 卒組式
- 26日~30日 新年度準備(※お知らせを参照ください。)
- 30日(金) ランチデー



## 愛のことば

わたしたちは忙しすぎます 微笑みを交わすひまさえありません  
ほほえみ ふれあいを忘れた人がいます これはとても大きな貧困です  
愛を与え、愛を受けることを知らない人は 貧しい人のなかでもっとも貧しい人です  
愛はまず家庭からはじまるのです 愛は家庭に住まうものです

子ども達は家庭のなかに愛やほほえみを見つけることができません  
子ども達は寂しすぎるのです 寂しさをまぎらわすために外へ探し求めに行くのです  
あなたはこの世に望まれて生れてきた大切な人 あなたが何であり何処の国の人で  
あろうと 金持ちであろうと貧乏であろうと それは問題ではありません

あなたは同じ神さまがお造りになった 同じ神さまの子どもです  
傲慢でぶっきらぼうで利己的になるのは いともたやすいことです  
でもわたしたちは もっと素晴らしいことのために造られているのです  
大切なのはどれだけ心を込めたかです。

わたしたちのすることは 大海のたった1滴の水に過ぎないのかもしれませんが  
でも その1滴の水が集まって大海となるのです

マザーテレサ

地面から球根の芽が見え始め、少しづつ春の足音が近づいてきました。

連日冬季オリンピックのニュースが流れていましたが、選手一人ひとりが様々な苦労を重ねてきたことが分かるからこそ、私たちは、一瞬にかけた思いに感動します。特にスピードスケート女子 500mでの小平奈緒選手の、レース後に、韓国の李相花選手に駆け寄り抱き合う姿が印象的でした。政治的な問題が両国の間で消えませんが、オリンピックという世界中が注目する舞台上、ライバルとして競い合う二人が、一方で支え合い、尊敬しあう絆で繋がれているという事が証された瞬間のようで心を熱くしました。きっと、同じ目標に向かって鏝（しのぎ）を削る中で、自然と芽生えた友情なのでしょうが、小平選手自身が語る中で、常に自分が今あるのは色々な人に支えられているという思いを忘れない、感謝をもってスケートをしていると答えていました。

その小平選手を経済面で支え続けたのが、企業ではなく「相沢病院」という医療法人の理事長です。高校卒業時にはインターハイ優勝の成績を引っ下げている小平選手に当然のように実業団の誘いはありましたが、それを断り、大学進学（信州大学）を選択しました。

大学卒業後、長野に残り師事する結城監督（金メダリスト清水宏保選手を育てた）の下でオリンピックを目指したいという思いがありましたが、そこに答えてくれる企業はなかったということです。そこで、結城監督が、小平選手が以前怪我をしてお世話になった相沢病院の相沢理事長に相談したところ、二つ返事でOKをしてくれたそうです。その相沢理事長がテレビのインタビューに答えていましたが、「それだけの才能があり一生懸命頑張っている、しかも、地元から上を目指したいと言っているものにどうして皆手を差し伸べないのか。」と不思議に思ったそうです。

契約内容も、病院の職員として事務員レベルの最低限の給与の補償しかできないが、病院の宣伝などは一切しなくてもいい、練習に専念しろ、といったものです。しかし、最低

保障とはいっても国内海外の遠征費の補助も含めて年間で1000万円位というのですから、相沢理事長の懐の広さが窺えます。海外の国が文化の一つとしてスポーツに金銭的保証をしているのに対し、日本のそれは遅れているというのはよく耳にすることですが、反面こういった理解者によって日本人選手の場合支えられているのだと改めて思われました。

そういった背景や、オリンピックだけでなく世界選手権などの舞台で1・2位を争い、この10年日韓の女子スピードスケート界を牽引してきた二人にしかわからない思いが、ウィニングランで李選手が流す涙に思わず差し伸べた小平選手の「手」に象徴されていたのではないのでしょうか。そして「I still respect you (わたしはまだあなたを尊敬している)」

ただ単に慰めではなく、心からの言葉に聞こえます。1位には称賛の言葉があるけど、2位に送られる言葉はなく、自分がどうしていいかわからなくなる。だからこそ自分が掛けてほしい言葉を「私が言ってあげないと」と思った、そうインタビューに答えていました。

相手の立場に立って感じたり思いやる心は、涙した者同士だからこそ分かり合えるものなのかもしれません。姉妹でオリンピックの出場し、金メダルを獲った高木菜那、高木美帆選手も同様です。小さいころから妹ばかりが注目され、カルガリーオリンピックに15歳で出場した妹の試合を応援席で観ながら「ころべばいいのに」と思ったと姉の菜那は告白しています。ソチでは、努力型の姉が出場、「どこか甘くみていた」天才型の妹は落選し、初めて応援席で「姉の気持ちがわかった」と話していました。

保育園では卒園式に向けた合奏や合唱の練習が始まっていて、「ありがとう、さよなら」の歌声が聞こえてくると、「もうそんな時季か・・・」と一年の早さを感じます。

そんな年長児に、合奏する音を奏でる時の気持ちを聞きました。同じ曲でもどんな気持ちで奏でているかが音に表れることに気づいてもらいたいと、ピアノで「あらあらしく」「やさしく」「けいかいに」「しずかに」と弾くと、子どもたちが「うれしそう」「たのしそう」「やさしいきもち」などの感想と共に、「てきとうなかんじ」という声も聞こえてきました。「そう、音や声にはその気持ちがのって他の人に届くのね」という気付きと同時に「みんなはどんな気持ちで合奏の音を届けたい？」と聞くと、「今までみんなありがとうの気持ち」と返事が返ってきました。子どもたちはお友だちと切磋琢磨したからこそお互いの気持ちが分かりあえたのではないのでしょうか。自分も努力したからこそお友だちの苦労も分かってくれてあげられて努力を認めたり称賛できる姿が合奏練習で見られます。

数か月もすれば小学校へと旅立ちます。子どもたちへ願うのは、長い子は6年、短い子だと2年足らずですが、この幼少期を共に過ごした仲間の存在というのは大人になっても大きな宝となるであろうし、光の子で培ったお友だちへの思いやりを大事にこれからの人生を過ごしてもらいたいということです。「生きる力」を養うために、この年齢の時期にしかできない様々な経験をできるだけ体験してもらおうと、先生たちは頭を突き合わせ、色々な取り組みをしてきました。そして、大人の介入がない場面でも、子ども同士の解決が図れるように自分たちで考え答えを導き出せるように見守ったり、「本当の声」を聞くために辛抱強く耳を傾け、「自分の言葉」で相手に伝えられるようにと子どもと一緒に切磋琢磨してきました。

種は蒔き終えようとしています。あとは、子どもたちが芽を出し花を咲かせる番です。どんな花を咲かせるのでしょうか？どんな花であれ、「世界に一つだけの花」をナンバー1にならなくてもいいので、その子らしく堂々と咲かせて欲しいものです。